

都市計画が専門でみなさんとはあまり接点がない分野で活動していますが、これからはもう少し接点が増えるようになるのではと思っています。

都市計画の中でも、あまり有効に活用されていない公共空間を活用することで都市を活性化できないかということをやっている。

例えば、水都大阪。10年以上やっている。

(水都大阪の事例の説明) 規制緩和をして水辺の地域、建築など利活用して名所を作っている

皆さんご存知の通り、万博開催が決定しました。万博の開催目的がここに書かれています。2025年大阪・関西万博が目指すもの。国連が掲げる持続可能な開発目標 (SDGs) が達成される社会と、日本の国家戦略 Society5.0 の実現が目標とされています。Society5.0 というものは、超スマート社会というものをめざしましょうというものです。テーマは、いのち輝く未来社会のデザイン。サブテーマは、多様で心身ともに健康な生き方、持続可能な社会・経済システムとこの 2 つがサブテーマとなっています。そしてコンセプトは未来社会の実験場ということで、これが今回の大阪関西万博の特徴となるので、後ほど又ご紹介できればと思っています。経済波及効果が 2 兆円、会場の整備費で 1250 億くらい、運営費 850 億くらい。3000 万人くらいの来訪者数。が数字としてでてくる。関西の強みとしてライフサイエンス、バイオケミカル、そしてここには出てないのですが、日清食品さんなどに代表される食品、それからアシックスさんなどのスポーツメーカー、日常生活の身近な産業、ハウスメーカーさんなど、そういうところが集集して新たなイノベーションを起こせるのではないかと。そんな中、先日発表されましたが、百舌古市古墳群の世界遺産の登録が決まりました。歴史・文化も強みとして関西で万博をする意義もあるのではないかと思います。(万博決定までの資料の年代訂正)

実はこれ以前の話があって、確か 2014 年くらいに、先日亡くなられた堺屋太一さんが万博をしたらどうかと言われた。昔の 70 年万博の時のお金で基金運用されいているところの会議の会場でそのように話をされたと聞いている。それが一番最初。ずっとこのプロジェクトにかかわっているのは大阪府立大学の橋爪紳也さん、最初は、橋爪さん、堺屋太一さん、大阪府の企画部の職員が何人かがんばっていろいろ話からスタートしたと聞いている。その後、一年くらいやっていたが、その後調査をやってみようということになり、2015 年 4 月に国際博覧会大阪誘致構想検討会というのが始まります。これで一年くらい検討を重ねて、府市ともに大阪万博をやろうかという話が方向としてできました。

実は万博というのはオリンピックとの違いでいいますと、オリンピックは IOC、万博は BIE で、オリンピックは都市で立候補するので、立候補する主体は東京都になります、万博は国が立候補します。国で開催する。正確には日本万博となります。国が立候補するので、大阪やりたいといって、はいどうぞとはならないわけです。大阪が手を上げて、そこから国、これは経済産業省が担当になりますが、経産省が、よし、国として立候補しようかと決めていただかないことには立候補にはならないのであって、まず大阪府の方でどんな万博をしたいのか考えなさいということになったようです。それを大阪府が提案をして、それを受けて国がどんな万博にするかを考えるようになっていきます。2016 年 6-10 月の「2025 日本バンコク博覧会基本構想検討会議」これが大阪府の会議で、私はまずここからかかわらせていただきました。

その後、大阪府から国への提案も出させていただいて、国の方での構想の検討はわずか3ヶ月しかなくて、短期間でぐっとスピードでやられて、国の方で提案書を書かれて、ぜひ国でやりましょうということになってそれまでは地元の大阪中心でやっていたのですが、2017年からはこの誘致委員会なんかも、国などと大阪府大阪市、経済界、経済界はそれまでは関経連、大阪府なら大阪商工会議所だったのが経団連という形に、オール日本の枠組みにシフトしていきます。2017年9月BIEへ立候補申請を出しまして、2018年、昨年大阪観光局の溝畑さんという人がまっ金金の服を着てニュース画像にもたくさんうつっていましたがみんなでリーガロイヤルの会場を借りて待っていたということがあります。

今年からは2025年日本万国博覧会協会が設置されました。私はこの大阪府が作った基本構想策定のときに、特に会場計画ですね、会場をどこにするか、会場計画をどこにするかということを書かせていただいたのと、招致委員会というところでアカデミックアンバサダーというのをしましたけども、いろんなところに行って、万博いいですよ、ぜひみなさん応援してくださいというような広報活動のようなこと2017年から万博が決まるまでの間、いろんなところに行ってやっていただいたという経過であります。アカデミックアンバサダーがどういう人たちかという、この表のような感じの人たちで特に東京大学の秋山先生は大阪府の構想のときにも入っておられましたし、経済産業省の構想の座長もされています。あとは阪大の森下先生、橋爪先生、この3人はだいたい全部入っている。秋山先生は高齢化社会研究の第一人者でありますので、秋山先生の思いが色濃く反映されている構想になっているかなあと思っています。私が秋山先生の話の中で非常に印象に残っているのは、本にもたくさん書かれています、人生100年時代になる。人生100年時代になると、人生が2度楽しめる。今までは、60歳くらいで定年して、妻と20、30年の余生を過ごしてということだったんだけど、これからは健康寿命が増進されてくるというようなこととか、医療とかテクノロジーが進歩してくるとおそらく100年、100歳くらいまでは十分生きられると。100歳くらいまでなるということはもう一回、人生をやれると。ですから50歳くらいでいったんもう一回大学に行って、全然違う分野の勉強をしてもう一回、20、30年自分の経験を生かしてさらに新しく学んだことで、専門的な活躍をしていただくみたいな。そういう社会になると思えば、年をとるということはワクワクしますよね。そういう世界をめざさなければいけない。70、80になって体が痛い、足が痛いってということで、子供に迷惑をかけるとか、なんとなく生きているのが申しわけないという気持ちで余生を過ごさなくてはならないということではなくて、長く生きることがハッピーな社会を作らなければならない。技術的に長く生かすということができるようになったけれども、その長く生きているところをすばらしい人生を送れるようにするためにはまだまだやらなければいけないことがあるということ。そういう議論を基本構想のときにしていました。そのあたりがすごくこのコンセプトに反映されているということです。

少し、どんな検討をしたかっていう年表をのせていますが、実はこの構想のときにもまだ会場も決まっていなくて、候補地も7か所くらいありました。候補地も全部まわってどれがいいか○×△とつけていたんですが、いろんなことを考えると、とにかく半年間とはいえ、3000万人の方がいらっしゃることですので、やはり交通の問題とかあります。そしてBIEが出している万博招致の基準もありまして、会場規模は最低でも100ha以上ないとだめだという状況がありました。皆様ご承知の通り、ここはIR、夢州というところに決まりましたけど、ここはIRの会場としても予定されていて、IRの会場と万博の会場は並立するのか、またここは埋立地の会場なので、まで現地に行ってくださいと水面が見える状態な

んですね。ほんとに間に合うのかどうかと検討していきました。結局、間に合うということで夢州は立地もいいし、アクセスもいいし、IRと並立も可能だろうというような形になってそこから、どちらかというテーマ・コンセプトをつめていく、あるいはこの会場をどう使っていくかというような話にうつっていったというのが流れです。

まず、前半はですね、大阪府の構想について話をしたいと思います。大阪府の構想ではなく、最終的にBIEに提案した国の提案というのをもちろん出しますけども、ちょっとどんな議論の経過をたどったのかということをご紹介するために、大阪府の時の基本構想の資料を少しご紹介したいと思います。まあ大阪府の構想ということですから、大阪府に都合がよく書かれているということはお容赦ください。そのうち、国もしくは大阪関西万博ということに枠が広がっていくことになります。もともと大阪府が考えていた時には「人類の健康・長寿への挑戦」というテーマでした。実はもっと健康、医療というものが前面に出たようなテーマでいこうというようなことでした。ただ中身はですね、世界中の人々がよりよく、Well-beingという提案を集めていきましょうとか、ライフスタイル、それから社会自体を変えていくような働きかけや提案ができるといいよねというようなコンセプトでした。背景としては、実はこれから日本はトップランナーですけど、世界の高齢化率というのは日本はトップですけど、そのあとをみんな追うようにこれから進んでいく。これから加速していくなかでどんな社会、どんな人にとって暮らしやすい豊かな社会を作っていくというのは大きな課題だろう。これを大きなテーマにできないかっていうことが当初の目論見でありました。大阪の強みということでもありますが、大阪は、というか日本はということかもしれませんが、医療、それから食、家電というような強みがあります。特に関西ですね。それからスポーツ、エンターテインメント、観光、レジャー、文化、それから地球環境の保全と共生ということで地球温暖化対策とかエネルギーとか都市計画とか、こういうジャンルで健康・長寿を支える分野は、生活全体を豊かにする分野はすべてにわたって裾野が広いということで、こういうサブテーマのところでも最先端の提案とかテクノロジーを活用していこうとか考えられていました。そういうことをやろうとしたときに大阪というのは関西のライフサイエンスクラスターであります。この図が大阪府の中にしかなくて実は〇〇〇が本当は入っているんですが、大阪府が作っている絵なのでゆるしてください。ということなんですが、関西というのはそもそもこういう分野が強い、これが絶対生きてくるであろうとか、文化・食・スポーツというところも強い。さらには、高い技術で支える中小企業も裾野が広いのでいろんなものづくりとかそういうところも連携できるだろうということでした。それで、次に国で、経産省の方で作られた資料がこれです。経産省の方に私は行ってないので、漏れ聞いている話だけになりますが、やはり健康・長寿というテーマだけだと少し弱いんじゃないかという意見があったと聞いています。それは何かといいますとまずBIEというところで投票してサイトを定めるんですが、やっぱり長寿・高齢化社会というようなことというのは先進国の評価は得られるけど、発展途上国なんかは少し、なに言うてるの？と少し共感を得られにくいようなテーマかもしれない。もう少し、あらゆる国の人たちが賛同できるテーマにしたほうがいいんじゃないかというのが一つ。でもう一つは少し、医療・産業・健康系にフォーカスを当てるということは、これは実は最初冒頭申し上げましたが1250億というお金がかかるときに誰に負担してもらおうということですよ。もちろん地元負担もある、国負担もあるけれども民間経済開発負担もあるというふうに健康長寿と言ってしまおうとそれにかかわる産業の方々にご負担いただくことになるということですね。そういうことを考えるとやっぱりもっと幅広く、大阪という意味では確かにライフサイエンスとか医療、健康系というのは強いということ強いんですけど、もう少

し日本全体でみればあらゆるいろんな産業があるわけで、そういうところにも参画していただけるような少し枠を広げた考え方でいったほうがいいんじゃないかというような形で少し組み立て方が広がります。そこは特徴です。

それでコンセプトは「いのち輝く未来社会のデザイン」というコンセプトに変わったと。変わったというよりか、より広がったというようにお考えいただいたほうがいいのか。多様で心身ともに健康な生き方、持続可能な経済システムというのを目的にするということです。ただ科学技術とか多様な文化・価値観とかこういうサブテーマのところは当初とあんまり変わっていないと思います。

ここからが構想の特徴ですけど、この辺を実は大阪府の構想で考えていたこととかなりオーバーラップしていてそういう意味では大阪府の提案を経済産業省の方でもかなりうまく受けとめていただいたと私は思っています。で、例えば関西商人、特に近江商人なんかが使っていた言葉と聞きますが、「三方よし」ということですね、自分がものを売ることでお客さんも喜ぶ。売る商人らも喜ぶ。お客さんや商人が喜ぶだけでなく、そういう商売をすることでその地域や社会自体が良くなることですよね。そういうことが実現するっていいだろうということなのでまさにこの関西の商売の発想みたいなものがまちづくりとか新しい社会づくりに役立つのではないかということです。

それからやはり **Society5.0** というテーマが設定されているということもあるので、最先端のテクノロジーとかそういうものを活用しながら未来社会のデザイン、いのち輝く未来社会のデザインを実現しようということですからいろんなものを社会的課題のテーマを設定することによって、いろんなテクノロジーで解決していこう、あらゆる知恵で解決していこうということになるので、そういうことを実際にやる、社会実証の推進がいりますねということです。これまでの万博と大きく違うっていうのはおそらくそこで、**2025**年にぽーンと万博をやるということだけではなくて、実はいろんなことをスタートしていかなくてはならない。**2025**年に向けていろんな取り組みが動き出してそれをぜひ見ていただくということが狙いになると思います。で、常識を超えた万博を目指そう、夢中になる新しい参加体験ができる。

70年の時の万博は月の石を見るために何時間も並んで、月の石を何秒か見てすごかったと、すごかったと思うしかないんですよね。すごかったと思わないと、俺は何のために待っていたんだとなりますから、みんなそういう風に思うわけです。でも正直、何やったんやろ、あれ、っていうのがあるわけですよね。で、そうならないために、無我夢中になる体験、参加というのが重要になるんじゃないかと。それからもっと言うと、疲れない、元気になる。もう万博行って帰ってきたら、並んで並んでフラフラやったという経験ではなくて、行ったらパビリオン入ったら5才若くなる、そういう話が出てましたよ、ということを目指しましょう。

それから特にこれですね、メイン会場の制約を越える。実は **BIE** に提案するときには、**100**ヘクタールという会場をきっちり1会場で確保しなくてはならないという **BIE** の明確な基準があったので、それは夢洲の会場でやるっていうことなんですけど、実は我々基本構想のころから議論していたのは、実は関西、大阪にたくさんのサテライトがあるという万博にしようよと、そういう考え方にしました。で、大阪万博とか関西を中心としたこの地域で、いのち輝く未来社会のデザインの実験場というのが実際にフィー

ルドとしてたくさんあって、それが、そこでの取り組みが万博の会場でも見れるし、もし非常に関心をもっていただいたのだったらその現場にまた足を運んでいただく。万博の会場に来て終わりというだけではなくて、関西の町を周遊していただくわけだから、そういうときにそういう実験フィールドも見えていただく。そういう形で大阪関西を盛り上げていこうということを考えています。またさらにはそういうのを VR です、たとえば海外から来られる方は実際来ていただける方がいいのですが、来られない方は区切られたゴーグルをつけてもらって、たとえば反対側アルゼンチンのブエノスアイレスにいてもバーチャルゴーグルでほぼ来ている人と同じような体験ができるとか、そういうとこまで目指しましょうと特に言っていました。で、誰もが参画しやすい万博とか、例えば期間中に限らない事業展開とか、こういうところも特徴なんです、たとえば会場の作り方なんかいろいろな人が普通に出席できる、もとは資本力のある企業しか出席できないとかではなくて、大学でも、大学生でも出席できるとか、そういうことを実現しよう、かなえようじゃないかということをやっています。

それから話し出すときがないのですが、ちょっと端折りますと例えば共創、のちにまたできますが、共に創ると書いて、共創ということが、Co-Creation といいますけども、たとえば会場の中のみなさんいろいろな意見をもっている方と一緒に創っていく。プロセス自体が普通今まではだれかプロデューサーがぱっと決まってその人が全部決めるみたいな世界だったのが、もっとネットワーク型でいろいろな人がどんどん知恵を出して、それが組み立てられることで形を作っていくみたいな、そういう Co-Creation 型でいきたいと思いますというのが特徴です。

少しここで、この招致活動の時に協会が作ったビデオがあるんですけども、たくさんあるんです。これも一般公開されているものです。その中の Co-Creation の部分だけを少し見ていただきたいと思います。

(動画視聴)

という感じで町全体が実験場になっているということを本当の万博の会場が実はネットワークでつながっているという形でやっけていこうというのが今回の万博の大きな特徴だと思います。

ここから少し話を移していきたいと思うのですが、私は都市計画が専門で 1970 年の万博の前の話を少しだけしたいと思います。これは丹下謙三さんという人が作った東京計画という新しい都市の計画です。実はこの大阪万博の頃のちょっと前にはですね、こういう新しい都市構想みたいなものがたくさん作られていた時代です。丹下謙三さんとか大高正人さんとか、東京どうするのってことですね。戸崎梓さんという人ですけども、非常にどんどん大都市が過密になっていく、人があふれているっていう状態で新しい都市を作らないと都市がパンクしてしまうというようなことでした。で、黒川紀章さんとかですね、こういういろいろな人がたくさん計画を作っています。例えば、安藤忠雄さんも実は大阪駅前ビルの再開発の時にこういう屋上庭園なんかがある提案をされていたりします。で、まさにこの万博前夜というのはまさに新しい都市の姿はどうなんだということがしきりに模索された時代でありました。我々のまちづくりの議論の中で非常に有名なものとして近隣住区論と言われます CA ペリーという人が作った、英語で言うと Neighboring Unit と言いますが、まちの作り方で幹線道がまわりを回っていて真ん中に教会とか小学校があってみなさんが利用する施設が中心で、周りに道路があるっていうことは通過交通は町の中に来ないということです。中心のコミュニティセンターの周りには公園なんかがあって子供たちが安心して遊べる。こういう暮らしやすく便利な町をどうやって作っていくかみたいな議論が考えら

れていきました。で実際にそういう理論で作られた町が千里ニュータウンとか泉北ニュータウンです。千里ニュータウンっていうのは近隣住区というものをもとに形が作られています。多摩ニュータウンとか高蔵寺ニュータウンとかあらゆる日本で作られたニュータウンというのはこの理論を元にしています。ちょうど1970年万博の時には、千里ニュータウンの開発と一緒に万博の会場が作られたということですね。当時はこれ、上田篤さんという人、京都大学の都市計画の先生でそのあと関大に移られましたけど、住宅双六というのを作っておられて、もともとは長屋とかですわそういうところにいたのが、最後は庭付き郊外一戸建てに住みたい、こういう何かこうライフステージみたいな人生の目標みたいなものがあったわけです。これが、それこそ2025年には確か団塊の世代の方が後期高齢者になる年であるということなんですけど、団塊の世代っていう人たちはこういうライフステージで歩いてこられたということです。で、こういうのをベースにしながら70年万博があったということです。で70年万博の年はどんな年だったかという、終戦1950年から2000年の間、人口がびっくりするくらい増えていく時代ですね。例えば、室町時代、鎌倉時代から見ても人類がおおよそ経験したことのない人口増というのを経験している時に万博がありました。一方で次の2025年の大阪関西万博はどうかというと、人類がおおよそ経験したことのないスピードで人口が減っていくときにどうすればいいの、高齢化率もそうなんですけど、こういう時代になってくる。で先程来、いろいろお見せしていますけども新しい都市の姿みたいなことがイメージされていきましたから逆のカーブの中でそういうことを我々は考える必要があるということです。

ところがですね、世界的に見れば世界の人口は増えていく、それから都市化は進む、というような状況にあって、日本とか先進国だけが少子高齢化、人口減少というステージに進みますが世界的にはまだまだ人口は伸びるという状態、あるいは都市化は進むという状態ですね。こういう問題とも我々は向き合う必要があるということです。

都市計画の分野では、そういう少子高齢化、人口減少社会をどう迎えるかっていうときに、自動車、最近も痛ましい自動車事故が続くんですが、87才の方がアクセルとブレーキを踏み間違えたみたいなことが起きるんですけども、歩いて暮らせるような街づくりをしていくというのが都市計画のテーマとしてあります。最近近隣住区というのがあまり言われなくなったんですが、最近はこの **The 20 Minutes Neighborhood** というのが大きなこととして言われます。20分圏内に生活に必要なあらゆるものが整備されているということです。仕事もある、友達なんかとも遊べる、もちろん必要な医療とかそういうも手に入る、それがだいたい20分圏内にあるということが重要ではないかということです。こういう社会を実現しようという時代が変わってきました。これに実際トライしている町が富山という町で中心市街地活性化ではこういう広場を作るっていうこともやっていますし、交通手段はMRT（低床式路面電車）を入れて車で乗らなくてもいいと。でも実は富山って日本全国の中では、一世帯あたりの自動車保有率は、1位は福井なんですけどね、でも2位か3位くらいのところにいます。例えば家族で3人住んでいけば、3台車があるみたいな、そういう生活をしてる町、自動車依存が非常に強い町なんですけど、それを変えていこうという取り組みをされていらっしゃる。子供が集まる場所、高齢者が集まる場所、レンタルサブプリメントサイクルなどを含めて町全体をそういう健康に暮らせる町に変えようとしている。あるいは空洞化している都市を賑わいのある場所へ変えていこうとしている。

こういう取り組みが街づくりとしてはやっています。例えばこれは今、グランドプラザという中心の広場の向かい側にこれは隈研吾という方が設計した再開発ビルなんですが、富山市の図書館と美術館が入っている複合ビルです。ちょっとこれはすごく面白いビルなんで、もし行かれることがあればぜひ見ていただければと思いますが、町の中に図書館をつけて日本で発行されているほとんどすべての雑誌が置いてある。図書館として適切なのかということですけど、それはわざとやっているんですね。ここにいけばあらゆる雑誌が置いてある、本屋さんは泣くんですけど、ここに行けばあらゆる雑誌が置いてある、それやからみなさんここに足を運ぶわけです。足を運んだらそのままの利用で帰るわけではなく、何もお金を使わずに帰るということではなく、ちょっとランチをしたり、ショッピングをしたりしますよね。そういう町にしようということでわざとそうした素晴らしい図書館をもってきた。さらに素晴らしいことにはこの図書館に私の本が3冊もおいてある。さらに素晴らしいという図書館であります。とてもうれしかったということです。

あと、例えばですね、皆さんの門限で近いものがあるということと言うと、これはよくご存知かもしれませんが介護用施設整備事業というのを今されていらっしゃるって、これは角川介護予防センターという名前だったと思うのですが、これは角川書店の角川さんらしいんですけど、どうも御親族の方がお亡くなりになられたときに寄附をされたらしくて、そういう健康に役立ててほしいということだったので、これは介護予防センターというのをやっているらしいです。介護予防センターなので基本的には健康な人を相手にしています。健康な人に健康であり続けるための運動なりいろんな指導をしているという、ちょっと世の中では非常に変わった施設です。だからGTLが落ちてきて、落ちてきた人をもう一回戻すということもある程度はやっていらっしゃるけれども、むしろ健康であり続けるための指導っていうのをずっとやってらっしゃる施設をやっています。これが本当にやらないといけないところかなあと思います。実は世界中の都市は、こういう人中心の街づくというのをやっております、ニューヨークのHigh Lineで国家鉄道を公園に変えるとかですね、こんなことをやっています。タイムズスクエアでは車をしめきって、人中心の広場に今後はするということをやっています。もっと歩くということをベースに町を作ろうとしています。ソウルの駅前も鉄道の駅を車が渡るオーバーパスの道を人中心の遊歩道に変えました。パリはセーヌ河の道路で車をしめきって全部遊歩道に変えようとしている。ていうようなことで都市自体の形を変えようとしています。

大阪は今いろんなことをやっていますけども、例えば天王寺公園の天芝っていう人が集まる広場のある公園に変えたりしてますし、南海の難波駅なんかは、これも今タクシー乗り場になってますけど人中心の広場に変えようということです。それから御堂筋は2037年には100周年を迎えるんですけど、フルモータル化といいまして車全部を止めちゃいましょうと言っています。2037年なのであと20年くらいかな。20年はないんですけど、それを実現しましょうと言っています。実際もう工事が始まってまして、今はですね、緩速車道、側道と言われるものを歩道に変えるという設計に着手しております、こういうお手伝いをさせてもらっているということです。難波駅前は今こうなっていて、それが順次北にのびていくということをしています。こんなふうに公共空間がどんどん変わっていくことが各地で行われてます。これは神戸の三ノ宮の駅前も、この前市バスの事故のあったところですけども、車をしめきって人中心の広場を作る計画です。ウメキタ二期、梅田の北側に実は駅前に大きな公園があってそれを中心に街づくりをしていきます。

冒頭、都市計画の分野と医療の分野は今まであんまり接点がなかったというようなことをお話ししましたが、実はこれはヤングエールさんが書いた本の中に書かれているんですが、実は都市計画というのをやりだした一番最初の原因というのは、伝染病なんですよ。人が集まって不衛生だと伝染病が蔓延するんですよ。公衆衛生に配慮した都市の在り方を考える必要があるというようなところで、衛生をやったり、下水をやったり、それから建物の隣道間隔を入れたり、住居には採光、通風をとれるようにしたり、いろんな基準をしたりしたことによって伝染病の蔓延というのはなくなりました。伝染病はあんまり増える傾向にはないんですが、その代わりに増えたのは何かというと生活習慣病ですね。メタボというものです。

こういうものに対処するもの考えるとやはり **MBT** というテーマがこれからのまちづくりに非常に重要になるのではないかとことです。それで今日は **MBT** にかかわるテーマはいろいろありそうなんですが、**SDG** について少しご紹介したいと思います。さきほど来、お見せしているような歩けるような町に転換していこうというような背景にはやはり快適な歩行者空間とか、歩きたくなる、それから公共交通ということなんですがやっぱり運動することによって健康な暮らしが送れるっていうことをベースに据えようってことです。こういうコンセプトが非常に重要になってきています。さきほどちょっとお見せした **20 minutes neighborhood** というコンセプトですけど、これはアメリカのポートランドという町ですけど、やっぱり分析するとダウンタウン、中心部はそういうポテンシャルがある。郊外部っていうのはなかなかそれがしんどくなる。まあ当然ですよ、郊外へ行けば行くほど施設へのアクセスが難しくなる。でこういうところになるとやはり自動車で移動するしかなくなるわけです。ポートランドなんかは面白い取り組みをして、**BMI** と住んでるエリアとの関係を分析したりしています。そうすると、都心に住んでいる人はやはり **BMI** が低いんです。で、郊外に住んでいる人は **BMI** が高い。つまり自動車中心で移動しているとやはり体がどうしても肥満になってしまうというようなことはわかってきています。そこで町の形を変えようってことがとても関心として高くなってきているわけです。例えば、エネルギーの消費量と体脂肪率の関係とか、それから歩きやすいとかいろんなインフラが整っていると外出する頻度が高まるとか移動距離が増えるとか、こういうことももういろんな調査で因果関係としてわかってきているということです。たとえば人口密度が高くて、高い都市と、エネルギーのこれは **SDDS** という自動車に乗っているか乗っていないかという考え方です。そうするとアジアの都市はとても優秀で人口密度が高くて公共交通あるいは歩くってことで暮らしているってことがわかります。この左上の方にあるのは全部アメリカの町です。こういうようなものをできるだけもっと人口密度を上げて、エネルギー消費を少なく、人間のカロリーを増やすと、運動カロリーを増やすという形で町を作っていこうということなんですが実は日本全国の都市を見ているともともとは比較的パフォーマンスが良かったんですが、だんだんだんだん縦に伸びてきています。地方都市が特に自動車依存が進んでいるっていうのが現状です。このあたりをどう変えていくかっていうことです。

自動車っていうものをどうしていくかっていうことがこれから重要になるんですが、実はこのへんのテクノロジーはもう既にオートパイロットの技術で完成の域に達しています。実は **2025** 年には高速道路での自動運転が始まると言われています。たぶん新東名と新名神なんですよ。6車線。片側3車線あるんですけど、そのうち1車線はおそらくオートパイロット専用路線になります。それはもう **2025** 年あたりの年にやりだす。オートパイロットの技術も各社しのぎを削っていますが、ほぼもうできるんですよ。



何が難しいかというと専門家の人に言わせると人が運転している車とオートパイロットの車と混ざるのが一番難しいんだそうです。だから一番やりやすいのは、恐らくどこか特定の地域だけ、特区を指定してやってオートパイロットゾーンみたいなのを作れば比較的早くやれる。恐らく 2025 年万博の時には、いくつかのモデル地域でそういうことが実際にやられているでしょうし、万博の会場もひょっとするとそうになっているかもしれないというところなんです。そういう未来社会のデザインというか、未来社会の実験場をいっぱい作ることでそれを万博の時に目指していくということが大きな考え方です。例えばこれはアメリカですね、アメリカの交通輸送担当者協会、交通政策社担当者協会 **Blueprint for Autonomous** ですから、まあオートパイロットですね、オートパイロットの都市空間というのはどう変わるか、どんな形になるかっていうことが示されています。こういう未来社会を作るというところで町づくりをしていこうと、それが万博でリンクさせていこうということなんです。

で、大阪で言えば実はまだリニアは入ってこないんですけど、いろんな町づくりは進んできていて、こういうのを実験場としてリンクさせていこうということなんです。先ごろ、大阪東線が開業しましたけれども、今度は難波の方から梅キタ通ってなにわ筋線という新線が通ります。夢洲万博まで直通で行く鉄道ができるというようなこともあってインフラがかなり進んできます。2037 年にはリニアも入ってくる。こういう町づくりがこれから行われる中で、そういう未来社会の実験場っていうのをたくさん作っていこうということなんです。例えば今自分自身もお手伝いしているのは、新今宮というところに今度星野リゾートさんというところがホテルを作るのですが、この新今宮の町づくりなんかもそういう未来社会の実験場としてぜひ新しい最先端のモデルを作ろうということをやっています。こんな形で各地で町づくりをしようと言っているんで、MBT さんの持っている例えば企業さんのネットワーク、あるいは医療の技術、そういうもので、今までもいろんな話をお見せしましたが、そういう町づくりをやってみたり、そういうものをうまく使いながら地域課題を解決して未来社会の実験場を作るっていうことでぜひ MBT さんと大阪関西万博が連携していければこの上ない、素晴らしいものができるんじゃないかというふうに期待をしているということをございます。最後は富山の図書館に置いてあった本がのってますのでもしよろしければまた読んでいただけたらと思います。私からのお話しは以上になります。どうもありがとうございました。

～質疑応答～

(細川)「うちの細井理事長が、実は関西経済同友会の中に設けられています、今は万博 IR 推進委員会という名前に変わったんですが、前は関西 IR 推進委員会という名前でやっておりましてそこで副理事長をやっておりまして、そこで私はスタッフとしていろんな提言の取りまとめと、作業をさせられてた人間であり、随分その という話がいろいろあったんですけど、IR 推進法の施工法がですね、国会ちょっと伸びそうな感じになってるんですけども、IR との関係はどういう風に先生のところではとらえておられますか？」

ちょっと2つの話がありまして、一つは、南側の会場。ここがおおよそ100haくらいの会場で、ここが万博の会場にしようと言っているところです。で、この北側、今何も描かれていないところ、ここがいわゆるIRの一期になるであろうと言われているところ。で、この西側のところ、ここが実は産業廃棄物の埋め立て地としているので緑地としては使えるのですが、建物を建てるのは難しい場所になります。ですから緑地的な利用はできます。でこのコンテナヤードの方はもうできてまして、要はここにおさまるかどうかということが一つ大きな課題でした。実は航空写真、グーグルマップとかを見ていただいたら、ここは水面なんですね、で埋め立てというのは土を入れたらすぐできるかと言ったらできなくて、土を入れてからだいたい圧密でだんだんだんだん沈下してくるんです。雨とか降ったりそんな感じで、土と土の間の空隙が大きいのでそれでだんだん埋めていくような寝かすような時間が必要になるんですね。でそうすると実は埋め立てしないといけないんですが、今急ピッチでやってるんですが、それが万博の開会に間に合うのかどうかということが一番大きなポイントでした。結論から言えば、頑張れば間に合うんでやりましょうということ。それとあと法律の関係でいうと、IRの法案はもう通っているんですが、実際にたぶんもう今回も遅れそうだということですけど、一番早いパターンだと2023年くらいにIRがくる可能性があったんですよ。あったんです。つまりIRは既にできていて、その横に万博が来るという可能性があったのでそうすると万博先やってIRどうぞ、後からどうぞっていうのはできないねと、IRが先に来るということを受け入れて、なおかつ万博ができる会場計画があるんだろうかということが一番大きなポイントで、結論から言うと何とか間に合って、何とか間に合わせるということです。で、この万博会場が建った後どうするかというと、このIRをさらにまた拡張していくというような形で、まあIRが一期に増えるという形で検討をしてました。そこができるかどうかというのが大きなポイントだったです。

(細川) さきほど万博の方で、大阪が作ったアイデアが結構医療よりにたっていたという。実は大阪で万博が決まったからIRを積極的に進めていったのは、よりに火をつけていったのは、関西経済同友会で学長が副委員長をしていた委員会なんですけど、この万博の時も基本的にはMBT的な発想をIR、万博にも入れたいということもあってそういう動きもあって、大阪から出た提案というのはどちらかというと医療よりの発想が結構強く出ていて、そういう意味ではこのMBTとこの万博の話、それからIRの話というのはそういう関連があったと。

(嘉名) かなりリンクしてますよね。

(細川) さきほど U ターンの話がありましたけども、要は大きな問題となるのは、逆に MBT の大きな課題の一つでもあると思うんですけど、今、一斉に作った団地が全部一斉に高齢化してしまって、高齢化率がものすごく高くなってしまっている。三木市なんかは典型なんですけども、そういう問題があってそういうところに対して MBT は MBT なの取り組みをしようとしているんですけども、先生の方では何かそのあたりについてアイデア等ありますでしょうか？

(嘉名) 例えばですね、世界で初めてのニュータウンというのは、イギリスの郊外にデッチワースという町があるんですけども、そこにいくと、できたのは 1003 年くらいだったかな、もう 100 年以上経っているんですよ。世界一のオールドタウンということですよ。世界で一番最初にオールドタウン化を迎えたニュータウン。どうなっているか。実は若い人がたくさん住んでいます。できた時のニュータウンと何が違うのかっていうと、同じ世代、子育て世代とか 30 代世代が一気に住んだということではなかったのかもしれませんが、かなり属性の人たちがばらついていてというのが特徴、印象的でした。で、日本の場合はどうしても第一世代ですよ、第一世代の人がそろそろお亡くなりになり、世代交代が進むと思うんですが、昭和 40 年代くらいの中で世代交代が行われ始めているということです。この次、たぶんやらないといけないのは、恐らく世代をどうミックスしていくかということが 1 つです。そういう意味では だけでは不十分で、もう少し多様な住宅バリエーションとか例えば、賃貸住宅で若い人が入るとか、若い人が住むってということと連動させるのであれば、あるいは例えば大学であるとか、専門学校とかでもいいんですけど、それから最近だと専門職大学院ですかね、専門職大学とか、海外から入ってこられる技能を持った方を受け入れるっていう話もでてますけど、ああいうものとリンクさせて多様な世代、多様な人材が住む町にしていく。で、そのことと共に、仕事を作るってこともとても重要です。恐らく多くの人たちは今も共稼ぎの生活をされてらっしゃるので、ベッドタウンに住んで奥さんが家において、お父さんだけ働きに行くというライフスタイル自体が若い人になじまないもので、郊外に暮らしていてもテレワークができたり、そういう形でちゃんと仕事を確保できるという形にしていけば、ニュータウンっていうのはやっぱり自然が豊かとか、子供たちが安心して暮らせるとか非常にメリットもあるのでそういう側面もある。

そのための町を作り替えるイノベーションみたいなことがこれから重要になってくると言える。